
おひさまsummer

詩代 歩溜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おひさまsummer

【コード】

N5909Z

【作者名】

詩代 歩溜

【あらすじ】

13回目の夏をむかえようとしていた千歳。いろいろあって、孤独だと感じるが多くなっていたある日のこと。

「ぴーなっつ」

わけのわからない声が聞こえて・・・

プロローグ（前書き）

大切な人と過ごす夏。

1秒でもいいから一緒にいたいんだ。

1秒じゃたりないんだけどね。

ブローグ

太陽出てるね。

今日は雨のはずなのに。

天気予報土さん残念。

でも私は嬉しいな。

昨日は「明日は雨なんだ。」ってすごいがっかりだったのに。

今、晴れててこんなに嬉しいのって天気予報を外してくれたおかげじゃないかな。

最初から晴れって分かってたらこんなに嬉しくなかったはず……。

天気予報ありがとーう！

まあ、でも、晴れだからって何かあるわけじゃないんだけどね。

お空の上で喜んでるあなたを想って私が勝手に喜んでるだけだよ。

きつと今日はいい日だよ！

ニユースの占いでは最悪だったけどね。

l o s t f a t h e r

「いつてきます。」

その言葉に対しての返事はない。前までは、「いつてらっしやい。」の声が聞こえないと部屋中捜しまわって家族を見つけて、無理矢理言わせてた。けど今はそんなことしたって時間の無駄。だって誰もいないもん。いつからだろう？お母さんが帰ってこなくなっちゃったの。最初は寂しかった。去年・・・だから、中1までお母さんと一緒に寝てた私が、今はベッドに一人どころか家の中に一人だよ。不安で仕方なかった。ま、それも最初だけ。今は慣れっこさ。そうか、あれは1年くらい前のこと。

- - -

「お母さん！私、13歳になった記念に一人で寝る！」

私は自信満々に言った。それもドヤ顔で。でもお母さんは、

「そう、これで広々寝れるね。」

と、このひとことしか言わなかった。この時は何とも思わなかったんだ。

3ヶ月後・・・

お父さんが、仕事から帰ってくるなりこう言った。

「転勤が決まった。だから・・・離婚してくれ。」

その時20時で私とお母さんは夕飯を食べていた。お父さんの分もちゃんとあった。

「本気？なんの冗談？今日はエイプリルフルとちやいますよ。」

茶化すように私が言ったらなぜか怒られた。え？え？なんで私怒られたのかな？

「・・・分かった。」

はい？分かった？all right？イヤイヤ、私全然分からない。お母さんは何が分かったの？離婚だよ？離れ離れだよ？訳が分からないよ・・・。

「お母さん！お父さん！なんなの？説明してください。」

私が説明するよう催促すると、お母さんがクリップでつままれたように開きずらそうな唇を開けて説明してくれた。

「あのね、お父さんはね、私たち以外に大切な人がいるんだって。だから、私達は離れなきゃいけないの。一緒にいちゃいけないの。ずっと黙っててごめんね。千歳ちとせはお母さんとずっと一緒にいようね。」

え・・・？私はいまだに状況が理解できない。けど、お母さんは泣いている。もう、それだけでただ事じゃないことが分かった。

「お母さん、泣かないで！お父さん！私たち以外に大切な人がいるってどういこと？」

お父さんは真顔で答えた。

「お父さん、好きな人がいるんだ。でも、お父さんにはお母さんや千歳がいるから・・・。今まで何もなかった。けど、お父さん、福岡に転勤が決まったんだ。それで、その人に、「一緒に住もう。」って言われて。お父さん断れなかった。だから、こんな中途半端はいけないと思って、こうすることに決めただ。」

お父さんの言葉を聞いて、なぜか悲しいとか、寂しいとか感じなかった。感じたのは怒りだけ。

「私、13年生きてて、幸せじゃないって感じたことなかった。でも今日初めて感じた。ああ、私、不幸だな。って。こんな父親持ったこと。ううん。そうじゃない。ずっと不安でいっぱいだったお母さんの気持ちに気付けなかったことだよ！この上ない親不孝者になっちゃったんだよ、私。仕方ないよね、お母さんを幸せにできなかった者同士一緒にいたってさ。丁度良かったんだよ。離れることになつて。でも、一緒にしないでよね。お父さんは最後までお母さんを幸せにできなかったけど、私はこれからお母さんを幸せにしてみせるんだから！」

そう言い放った私の目にはもう涙が溢れてたことは言うまでもないよね。私が怒りを感じた相手って、こんな最低なお父さんにじゃなく、自分自身だったんだね。

お父さんのために用意してあった夕飯が食べられることなく冷たくなって、テーブルの上で佇んでた。

数日後

お父さんは家を出て行った。お金のことはちゃんとするみたい。私にはよく分からなかったけど。

その日も、お父さんがいなくなったこと以外は何も変わらないこの家で、私はお母さんと夕飯を食べた。私の好きな牛丼だった。紅シヨウガたつぷりの。私はいつもなら、夕飯の時に、その日あった出来事を話したい放題話していた。お母さんはちゃんと聞いてくれるの。でもね、その日は何も話せなかった。お父さんのこと以外の話題がなかったんだ。沈黙が続く。お母さんだから、沈黙しても別に気まずくはないんだけど、なんか落ち付かなくて牛丼の味が分からなかった。そんな時、お母さんが何か思い出したように話した。

「お父さんがさ、離婚の話を出した時、千歳がお父さんになんか話してたよね。あれね、お母さんすごく

嬉しかった。でもね、千歳はひとつだけ間違えてたよ。「お父さんは最後までお母さんを幸せにできなかった。」って言ったでしょ。

あれね、違うよ。」

「え……?」

「お父さんだってひとつだけかけがえのないものくれたよ。」

「……?」

「千歳だよ。お父さんは千歳をくれたんだよ。ほら、ひとつ幸せくれたよね。」

涙目で話すお母さんの顔を見て、私は大泣きした。さっきまで味のなかった牛丼が、いきなり塩味になった。そんな私を見て、おかあ

さんはやさしく笑ってた。

-
-
-
-

びーなっつの出会い

もう7月。あと2週間で誕生日が来る。去年まで、「たんじょうび」と聞けば、

(プレゼントはなにもらおう?)

それしか考えてなかった。たった1年しか経ってないのに、1年前の自分がひどく幼く感じる。いや、大人ぶってるわけじゃないんだよ?でもさ、今年は誕生日どころじゃないんだよね。早くお母さんをみつけないきゃ。このままじゃLonely Birthdayになっちゃうよ。

キンコーンカンコーン

鐘が鳴った。よし、お弁当だ。今日も屋上でランチタイム。屋上とかベタなスポットなのに案外誰も使わないんだよね。あ、みんな教室で食べるもんね。普通は。まあ、いいや。お昼食べよーっと。

風が気持ちいい。空はこんなに晴々としているのに、私だけ何でこんなにモヤモヤしなきゃいけないの?ほら、さつき教室にいたクラスメイトだってみんな、何も考えないで、ただ平凡に暮らしてるんだよ。この世に神なんて存在しないんだ。平等なんてありえない。

私は卑屈。妬みつぼくて僻みつばい。相手に悪く思われたくないから誰にも愚痴など言ったことがない。だけどそれは、“いい子”なんかじゃなくていい子ぶってるだけなんだ。家でも外でも。

こうして屋上に来るといつもこう思う。

「なんで私だけ?」って。

私以外の人もみんなモヤモヤすりゃいいんだ。って……。モヤモヤの原因は大体分かってる。けど、その原因無くそうってする気持ちはないわけじゃないのに、怖くてさ。できないの。

私って可愛そうなのかな……。

もってきたお弁当箱を開きもせず、青い空を眺めてただぼーっとしてたら、なにか幻聴のようなものが聞こえる。

「……つつ？」

なんか男の子のような声。低くて。耳をふさいでも聞こえるの。体の底から響いて聞こえてくるの。重低音って言うのかな？なんか眠くなってきた。

「ぴーなつつ。だってば！」

今度こそはつきり聞こえた。後ろだ。

振り向くとそこには男の子が立っていた。

「な……に……？」

あれれ？なんで私ビビってんの？男子苦手だから？いや、そんなことじゃないな。あ、苦手だけでも。

「やっと気付いた？オレ、9ヶ月も一緒にいたのにな。」

はひ？9ヶ月？

「それって……。」

「なに？」

「ストーカー……？ひいひい〜？！」

あるうことか私は取り乱してしまった。

「オレがストーカー？違うよ。ストーカーってあれだろ？あとついで、電柱柱の陰びしびしからこっそり観察して、家まで着いて行って、そんなでもって盗撮とかしちゃうやつだろ？」

「そうだね。詳しいんだね。」

冷めた目で見てやった。

「だからちげえって。話を聞けい！」

とりあえず私はその、“ぴーなつつ男”の話話を聞くことにした。

ぴーなつつのわけ

ぴーなつつ男が話し始める。

「ちゃんと聞けよ？めんどくせえから1回しか言わねえぞ？あのな、9ヶ月前って言ったらさ。率直に言っけどおまえの父ちゃんが出てった時期だろ？そう、その時くらいからオレはおまえの傍で暮らすことになったんだ。もちろん見えなかつただろうな。今までは。それはおまえの孤独な気持ちが小さかつたからだ。でも今、オレがこんなにハッキリ見えるってことは・・・。おまえは相当孤独なんだよ。」

苦笑いで話すぴーなつつ男。なぜだか無性にイラついた。

「私孤独じゃないよ！なにそれ！全然孤独じゃない！」

全力否定してやった。何よこの男は。初対面の人に、孤独だ、孤独だって。失礼じゃない。

「だから初対面じゃねえーんだって。」

はい？

「何勝手に人の心読んで！個人情報保護法を無視する気?!」

誰かと話すのなんて久しぶりだった。だからなぜか私のテンションはおかしかった。

「おまえのどの辺が孤独じゃないって？」

人の質問は無視かい……。

「どの辺って……。じゃ、じゃあ、逆に私のどの辺が孤独なの？」

「んー？何個言えばいいんだ？とりあえずまあ、強いて言うなら……。自分の思ってることちゃんと伝えられない？ってか伝えられる相手がいないとこかな。」

腕組みしながら、すました顔でいうぴーなっつ男。むかつくけど、まあ、言ってることは正しいかもしれない。私、思ったことどころか、会話出来る相手すらいもないもん。

あれ？なんでかなあ。この人には私、普通にものを言うことできる気がする。さつきもちゃんと、

「自分は孤独じゃない。」

って伝えられた。結果それは間違いだっけ気付かされちゃったけど……。なんか途端にこのぴーなっつ男に心開けてきた気がした。

「オレに言いたいこと言えるのはな、オレとおまえはぴーなっつだからだ。」

「はあ？」

ごめん。前言撤回だ。心開けた？こんな変人に？ないない。なにがぴーなっつ？ってかただけぴーなっつ好きなの？この男は。

「やっぱ変な顔したな。ははっ。今、意味分かんない奴だっけ思っ

「ただろ？当然だけどな。」

「……。」

「ぴーなっつってさ、どんな状態だ？」

「え……？どんな状態って？えっと、一つの実に、二つタネが入って……。」

「そうそう。そのタネがオレとおまえ。」

「はあい？」

「オレがおまえの傍にいることはおまえが生まれた時から決まっていた。驚いた？」

「おお……おふうう……。驚いた。」

「いまだに理解できてない……。生まれた時から決まっていた？ええっ？！」

「え、でもさ、私の傍に来たのは9ヶ月前なんでしょ？おかしいじゃない。」

「ああ、傍に来たのはな。でもそれより前からおまえのことは知っていた。」

「よく分かんないなあ。なんで9ヶ月前なの？お父さんのことが関係あるって言ってたけど……。」

「それはおまえが寂しがってたからだ。んー、孤独ってやつかな。」
またそれか。孤独か。ってか人の心をまた読んだのか……。まあいいや。

「私が孤独だからアンタは私の傍に来たの？」

「そうそう。あとさ、オレ、ぴーなっつ男じゃない。」

しまった。この男は心が読めるんだった。

「じゃあなんていうの？」

「太陽……だよ。」

小さい声で、この目の前にいる太陽は言った。

「太陽か。ふふ。温かそうだね。」

私がそう言つと、

「あれ？笑わないの？」

すごく不思議そうな顔して聞いてきた。

「え、なんで笑うの？」

ああ、私も質問返ししちゃった。

「うん。まあいいや。今度話すよ。それじゃ、教室戻れ。」

「うん。」

なりゆきにまかせて

太陽と衝撃的な出会いをして、まだ、現実なのか夢なのかよく分かってない。5時間目は体育。着替えなきや。そう思っただ教室に入ると誰もいない。あれ？時計時計。・・・ん？

いやああああー！ー！？

時計の針達は1時40分をさしていた。授業開始から10分も経っている。いままでベル席（授業開始のチャイムが鳴り終わってから席につくこと。）なんてしたことない模範的生徒だったのに・・・。よし、こうなったら仮病だ。保健室へGO。

保健室は私の教室、2年2組の教室を出て、30段階を降りて、反対側の校舎の1階。あちゃ、渡り廊下を渡るんだ。あそこは校庭からよく見える。ダメじゃん・・・。体育の教科担任、吉川先生はなんかすごく怖い。このまえなんて、授業中ふざける男子に柔道の・・・なんちゃらって技かけてたし。痛そうだった。

ベル席なんてしたらよくあるあの、校庭何周とかいう罰をつけるに違いない。それだけは免れたい。じゃあどうするか・・・。

「なあ。」

太陽？なんでここにいの？

「ここにいちやダメじゃん！見つかったらやばいよ?!」

「え、なんで？今日は転校手続きをしに来ただけだ。まあ、ホント言っと入学手続きなんだけどな。」

「なんで？太陽が？この学校に？入るの？なんで！？」

「おまえが寂しくなくなるまで傍にいるんだから、学校だつて一緒に行くんだよ。今までだつておまえと一緒に授業受けてたんだぜ？おまえが気付いてないだけで。」

え??？一緒に？

「じゃあテストの時とか回答見てたつてこと?!」

「当たり前じゃん。」

ぬわーんですと???

「勝手に見ないでよ!」

「別によくね？平均点よりちょっと下つてだけじゃん。」

それがいけないんだつて……。それにあのときは平均点がかなり下がつてた時だしね。それで平均点以下つて……。人に再び面を向かうべからず、だわよ。

それに、太陽つて喋んなきゃ、まあ、顔はいいと思うし、背も高いし。髪の毛サラサラだから、学校なんて来たら「彼氏ほしい」つて言うのが日常茶飯事になっちゃってるうちのクラスの女子の格好の餌食じゃん！

いや、今そんなこと考えてる暇はない。

「早く行かなきゃ!」

「それならオレにいい考えがある。」

「なにさ。」

「簡単なことだよ。オレの横を普通に歩いときゃ、おまえはちっちゃいんだから校庭から見えないだろ?」

あ、そつか。そんな簡単な事か。って

「人の子とさらっとチビ呼ばわりしてんじゃないわよ!」

「155cmで、よんじゅ……ぶっつ」

「なんで、なんで、なんで体重まで知ってんの?!変態?」

「は?よんじゅうまでしか言っただろ?!」

「なんだ知らないのか。ほっ。」

「保健室いくんだろ?ほれ。」

太陽がいきなり私の腕を引っ張った。

あっという間に渡り廊下に着いた。

「普通に歩けよ?」

「う……ん。」

うわあ。なんか緊張してきたよ。ばれないと思うけど……。あれ、渡辺君見てる？気のせいか……。なんか長くない？こんな長かつたけ？この廊下。ん？なんか顔が熱くなってきた……。心臓がドキドキというかフィーバーしてる。。。

「着いたぞ？そこだろ。保健室。行ってこいよ。」

「あ、着いた？太陽、ありがと。」

私が軽くお礼を言うと太陽は微笑んでた。気持ち悪いな。

なんだアイツ。

「失礼します。」

「あら、福井ふくいさん。あ、ごめんなさい。ホントに。」

「いや、全然……。」

両親が離婚して、私の苗字は福井から夢咲ゆめさきになった。

「あの、夢咲ゆめさきさん。どうしたの？」

「頭が痛くて……。」

うそうそ。ちょっと顔が熱いだけ。

「ホントね。顔がちょっと赤い。熱測ってみて？」

そういつて、保健の先生、はなその花園先生は、体温計をくれた。

・・・。

「ピピッ」

37・0

ミラコーだ！ミラコーが起こった。あら、神様っているんじゃない？

「どれ。あら、37か。どうする？帰る？もつ少し様子みる？」

即答で。

「帰ります・・・。」

「じゃあ、荷物持ってくるね。」

「あ、自分で行くので平気です。」

「あ、だいじょぶ？じゃあ電話しなきゃ！夢咲さん、お家の番号は
「？」

「家、誰もいないので、歩いて帰ります。」

「平気なの？私が運転できればなあ。気をつけてね。」

「はい。ありがとうございました。失礼します。」

早退届けだけ持って私は保健室を出た。

あら、太陽君。ずっとそこにいたのね。

「うん。あ、どうだった？」

え？この方、心読めるんじゃないの？

「なんか、読める範囲があるらしい。」

「読める範囲？」

「ああ、壁一枚はさむと読めない。多分表情で判断してるからだ。」

「表情？」

そうか。表情か。じゃあ、

（アイス食べたい。）

そう思って、とびつきり変な顔をして太陽を見た。

・・・。

なに？この沈黙・・・。もしかしてスベツた？恥。

「・・・ぶふつ。「アイス食いたい。」だろ？」

「なんで？何でわかったの？」

「え、顔に書いてあった。」

はひ？あんな顔に？どの辺に？理解不能だ。

「熱が、ちよつとだけあつた。」

「大丈夫なのかつて・・・当り前か。」

「ふふつ。あ、荷物持つてこなきゃ。」

私と太陽は行きと同じ方法で渡り廊下を渡つて教室にたどり着いた。
後ろの方の扉を開けた。

！！！！

渡辺君？！え？なんでいんの？

「あ、夢咲さん。そちらは・・・？」

なんか言ってる。え？私？何で私に聞いたの？私はあなたと喋りたくないんだけども。

「あ、オレは・・・太陽。明日からクラスメイトだよ。よろしくな。」

にっこりして太陽が言つと、

「にっこちこそ。」

つて渡辺君も笑つた。

「じゃあな。」

私達が教室を出てくと、渡辺君が手を振っていた。

なんだ……。渡辺君っていい人じゃん。なのに私、勉強以外に興味なさそうだからって勝手に嫌なイメージ持って……。最悪じゃん。私以上にブラックハートな人っているのかな？

「まあ、第一印象でイメージよくないのは仕方ないとして、話そうともしないで悪いイメージ持つのはよくないはな。」

「そうだよね。気をつけなきゃ。」

今度渡辺君と話してみようかな。

「あれ、太陽も帰るの？」

「当たり前じゃん。」

「どこに？」

「は？おまえと一緒にどこだよ。」

「はあ？？」

私達は校門を出た。

そこにあるもの

.....

あれ。ここは私の家ですよ？なんで私の居心地が悪いのかな？

それは・・・

「オレがいるから、だろ？」

「分かってんならなんで入ったんだよ？大体今日初めて会った人をうちに入れるなんて・・・。」

「だから初めてじゃねえって・・・。」

「私にとっては初めてなの！」

「変な感じだな。オレは半年以上一緒にいるのにな。」

「知らないよ。。。でも、いや、やっぱなんでもない。」

「初めて会う割にはよく話せるのが不思議・・・だろ？」

「分かってんならいちいち声に出すな！なんか恥ずかしいじゃん。あ、そうだ。さっきさ、授業も一緒にうけてたって言ったでしょ。でもなんでクラスのみんなにバレなかったの？」

「え、おまえがオレを見れなかったように、おまえがオレのこと見えるようになるまでは他の奴にも見えないんだよ。」

「そういうもんか。聞きたいことたくさんあるんだけど……。全部聞いてもいい？」

「ん。別にいいけど。」

「じゃあさ、私が生まれた時から太陽が私の傍にいることは決まっていたって、あれはどういうこと？」

「ああ。人つてさ、絶対魂を持つてんだろ？でもオレみたいな奴らは単体の魂じゃ、体に入る事も何かを考えることもできない。つまり、ホントの人間の魂と同盟を結ばなきゃ生きれないってことだ。その同盟の名前がさつき言ってた「ぴーなつつ」だよ。それは代々継がれてきた名前らしい。オレはおまえに呼ばれた。その時から同盟は成立する。そんだけの話だよ。」

「そんだけ？やばい。まったく分かんない。「ぴーなつつ」のくだりまでは分かった。けど、私が太陽を呼んだ？なにそれ？」

「魂が呼ぶんだよ。んー。逆に言うと、オレらは人間の叫びを聞く」と引き付けられるっていうか……。あ、でもすげえんだぞ？同盟結ぶって。大抵は結ぼうとすると「なんか違う。」ってなって結べないことが多い。それほど強い叫びじゃないと結べない。じゃなきゃ、オレみたいにならずと一緒にいる。なんて軽々しく言えねえもん。」

「そういうもんかあ。同盟ね。貿易みたいだね。私と太陽はなんで結べたのかね？なぞだ……。」

「それはオレにもわかんねえ。けど今オレに入ってきてる情報では

同盟を結べたのはオレとおまえと、あともう1組だけらしい。すげえな。」

すげえっ。だって世界中で人間って約70億人でしょ？70億分の2ってやばい！世界規模で抽選2名様のカンペーンやったとして、私ともう一人誰かが当たったってことでしょ？うわぁー！私今まで何応募しても当たったためしがないのに。

お父さんはよく当ててたな。お父さん、今何してんのかな。元気がな。最初のうちはやっぱりお母さんの心を傷つけたお父さんが許せなかった。けど時間がたつにつれてお父さんとの思い出が蘇ってきてちゃってさ……。あれ。おかしいな。目から涙が……。鼻から鼻水が……。

「おまえさ、泣きたいときにどうして我慢すんの？泣きゃいいじゃん。」

「……だつて。泣いたっておかあさんもおとうさんも帰ってくるわけじゃない……。」

「泣いたら帰ってくるなら泣くのか。じゃあ一生帰ってこなかったら？一生泣かねえの？無理だろ？そんなこと。人間なんだから泣け。無理して笑うな。」

「うん。ううあああー……！！」

このあとどんくらい泣いたんだろう？太陽の服鼻水と涙でびちゃびちゃだった。ごめん。

いっぱい泣いたらすすきりした。けど、目が膨張した気がする。

この後も太陽に色々質問した。

- 私のところに来る前はどこにいてなにをしてたの？ -

- 寝てたんだよ。空の上で。おまえに呼ばれたから行ったら、大きくなってて驚いた。 -

- 太陽はどうやって生まれたの？なんで男なの？ -

- それだけはオレにも分かんねえや。 -

- 太陽は言葉とかどうやって覚えたの？ -

- 目が覚めた時にはなぜかもう理解できてた。 -

最後にもう一つだけ・・・

「どうして太陽って名前なの？」

「どうしても話さなきゃダメか？」

「うん。だめ。」

「なんか。目が覚めて、おまえのどこに行く前、不思議なじいさんに会って、あの子のそこへ行くなら名前がなきゃ不便だろうって、その、なんか、おまえにとって太陽みたいに温かい存在になれって。言われて・・・。だあ！なんだこれ。」

激しく照れる太陽が可愛く見えた。

「そんな由来があったのか。なんで、」

「え？」

「少しも恥ずかしがることないじゃん。そんな由来なら嬉しい。」

素直に私は嬉しいと思った。

私は太陽の姿を今日初めてみたけど、やっぱりどこか初対面のような気がしないのは、私達が

「ぴーなっつ」だからなんだね。

ピルルルルルルツ・・・

あ、電話。はい？知らないなあ。無視しようかな。

「出る！」

え？

「はい、夢咲です。え・・・？？」

電話は病院からだった。

過去の涙にさよなら

午後4時だった。家に電話が来た。病院からだった。お母さんが病院に運ばれたらしい。8ヶ月前に家を出て行ったお母さん。出て行った理由は私にも正確にはわからない。けど、明らかに元気がなかったのは分かった。お父さんが出て行ったあの日の夕飯、一緒に牛丼を食べて以来お母さんとは一緒に食事をしてない。次第にお母さんはあまり家に帰ってこなくなった。私が学校に帰ってくると、たまにお母さんがいる。

「――」

「ただいま……。あ、お母さん。帰ってたの。今日のご飯は？」

「うるさい。」

「ごめん。じゃ、あとで私がつっておくね。お母さんのす……」

「うるさいっつってんじゃん！お母さんの分はいらないから！」

「そう。」

お母さんは寝室へ行った。今は6時半。まだ寝るはずないよね。

「いただきます。」

テーブルの周りには3つイスがある。使われてるのは1つだけ。お父さんが出て行ってから2週間経つのにいまだにお父さんの歯ブラシ、コップ、箸などは残っている。捨てればいいのに。

私は年相応に料理はできる方だけど、あんまり美味しくできないんだよね。なんでかな。

あ、明日資源回収だ。お父さんのもの出しとこつ。

翌日

ゴミを出した。

今日は月曜日だから部活がない。早く帰ってこれた。

あれ？

開いてる。お母さんいるのかな。

「ただいま。」

「千歳？ちよつと・・・」

お母さんに呼ばれた。なんだろう？

え？荒らされた部屋。お母さんの、今まで一度もみたことが無いような怖い顔。あれ、私、朝、鍵かけたよな？空き巣はないと思うんだけど・・・。

「お母さん何？」

「お父さんのもの捨てたの千歳・・・？」

「え、そうだよ。いつまでも持つてても仕方ないかなって……。」
一瞬間が空いた。

「っ……つぎけんなよ!？なんであなたはそうやって勝手なことばつかするんだよ!！」

な、なにになに?お母さん何?え、苦しい……。やめてよ。

どかつ

あ……。

「お母さんごめんね?」

勢い余つてお母さんのこと蹴っちゃった。

「あんたはホントに親不孝もんだねえ。はははっ。親の顔が見てみたいねえ!!それは私だよ!!！」

お母さん?もうこの人はお母さんじゃない気がする。

- - -

この出来事があったてから2週間後くらい経ってから、朝起きるとお母さんの姿がなかった。朝いないことはたまにあったから別に驚かなかったけど、その次の日も、その次の日も、お母さんは一度も帰ってこなかった。

「千歳はお母さんとずっと一緒にいようね。」

あの言葉。信じてたのにな。

やだやだ。また涙が。

今は電車の中。太陽と2人で総合病院まで行くの。お母さん危険な状態らしい。

薬物だつて。この前学校で習った。私は絶対嫌だと思った。怖いもん。なのにそれをお母さんがしてたなんて。信じられない。

着いた。

「あの、夢咲です。」

受付の看護師さんに声をかけた。

「あ、夢咲さんですか。あちらへ。」

私達は、指のさされた方へただひたすら進んだ。お母さんのいる場所はずぐに分かった。けど、なんか途端に怖くなってきた。でも、入らなきゃ。

「お母さん……?」

これがお母さん?誰かと思った……。

お母さんはこんなに痩せてない。

お母さんはこんな顔悪くない。

お母さんはもつときれいな髪の毛だった。

お母さんはもつと・・・優しそうだった。

なんで？なんで？お母さん？起きないし・・・。

「お母さん？お母さん！」

いくら呼んだって1mmも瞼は動かない。

「今日は、もう帰ろう。な？また元気になったら来ような。」

太陽が私の背中を押す。私は従うしかなかった。

ダメだ。今、口きいたら絶対涙が・・・。あ、そつだ我慢しなくていいんだ。

「太陽。お母さん平気かな。死んじったりしないよね？」

やっぱ出て来た。もう止められないや。

「ああ。信じてる。」

「え？」

「お母さんは死なないって信じてる。そつすりゃ大丈夫だ。」

「うん。そつする。」

根拠はないけど、そう信じることにした。今私は泣いている。それに笑っている。

もう過去のことです泣くのはやめよう。私は未来、これから先に繋ぐために泣こう。

お母さんが無事であることを信じて・・・

はじめまして。

昨日は大変だった。お母さんが病院に運ばれたことを知り、そのことがショックで泣き崩れた。いまだに立ち直れてない部分もある。お母さんが病気が何かで病院に運ばれたならそこまでショックではなかった。でも、麻薬関係だったら体調がよくなり次第、刑務所行きでしょ？そんなの……。でももう泣かないよ！昨日泣き切ったもん。太陽に迷惑かけたし。ウジウジしてたつて変わんないもんね！元気に行こう。

太陽は結局家に住むことになった。なんか他人と思えないし。ご恩もたくさんあるからさ。

それにしても……。私の部屋で寝ることなくない？

「いつもここで寝てたから。」だって。えええええ？？？いつもかい！って話だよ。っていうか……。

「おはよ。」

！！！？

「いきなり話しかけないでよー！」

「どっせ起きてたんだろ？早くしねえと遅刻だぞ。」

「8時半までに登校すればいいから平気ですう〜！〜！」

ん？7時50分。Oh!No!

私の家から学校まで、2?ちょっとある。だからいつも7時45分には家を出ている。これじゃあ、朝ご飯食べれないし……。お弁当も無理だ……。パン注するしかない。お金お金。

・・・あれ?なんか見てる。

「……………」

何が言いたいんだ?私はあんたの心は読めないっつうの。

「お金……下さい。」

ああ。お金か。

「いいよ。でもDパンね。(一番安いやつ。)」

「マジか……………」

そのDパンは成長期の敵かつ!てくらいの量しか入ってない。でも私のお小遣いの量ではこうするしかないんだよ。お金どっしよつ。この先1ヶ月分の生活費があるかどうかくらいだ……………」

時間ヤバイ。それはあとで考えよう。

髪の毛は寝癖付いてるからお団子にしちゃおう。歯磨き完了!出発!

「間に合わないかもだから走るよ!」

「おう。」

あれ??自分で走るって言ったのに……。太陽とかなり差が付いてる……。私こんなに走るの遅かったっけ?

「ほれ。」

気付けば太陽は目の前にいた。太陽の手をつかんだら、そのまま引っ張られた。なんかデジャヴ。昨日のあれだ……。

着いたけど、疲れた。これから授業とかがあり得ないし。

「オレはこの後校長室行って転校手続き完了させてくるから!HR中にはおまえのクラス行くから!じゃーな!」

と言いながら太陽は、私の靴がある下駄箱と反対方向の下駄箱に靴を置いて出て行った。

ガラッ

本来、誰かが教室のドアを開けると「おはよう。」って聞こえてくるはずなんだけど。私の時には聞こえない。1年の前期までは友達だっている方だった。後期に入ってから徐々に友達が減っていった。私が減らしたのかもしれないね。どうでもいいんだ。私の話相手は一人で十分。変なやつだけどちゃんと話を聞いてくれる。うん。あの方で十分、十分。

「今日、転校生来るんでしょ?」

「男子だって!カッコいいかなあ??」

「いやあ。あんま夢見ないほうがいいよ……。」

「あっはははははは……！」

「あ、千歳の隣じゃん！むかつく。」

「まだカッコいいって決まってるから！」

私の名前気安く呼んでんなよ。もうみんな太陽のこと知ってるのか。あ、この子達だよ。「彼氏欲しい。」って言うのが日常茶飯事になっちゃってるっていう人達は。私はあまりかわりたくない。嫌な思い出ばかりだから……。

キンコーンカンコーン

あれ、あっという間にHRの時間だ。私の席は一番後ろ。くじ引きでこうなった。私は窓際から2番目の席。人数の関係でこうなった。もう机が置いてある。ここが太陽かな。

先生が入って来た。太陽が横にいる。

女子うるせえつ。男子は固まってる。そっぴや太陽に苗字ってあんなのかな。先生がチヨークを持った。

五十嵐 太陽

「五十嵐太陽いがらし たいようです。よろしくおねがいします。」

すごい歓声。でも今一番驚いてるのは私だと思う。

「五十嵐」って私の大好きな歌手の名前。太陽は知ってたのかな？
なんかすごい。

「五十嵐の席はあそこな。」

案の定私の隣だ。ああ、やっぱり女子に睨まれてる。気にしない気にしない。
太陽が席に向かって歩く。

「よ。驚いた？」

「当たり前じゃん……。知ってたの？」

「それこそ当たり前じゃん？」

「そっかあ。」

なんか照れた。

キンコーンカンコーン

終わったー！次は理科か。教室だよな。うん。準備して待ってよう
つと。

ドカツ！

なんだよ？？ちょっとムツとしながら左側に顔を向けると……。
アンビリーバボー。なんだこの女子の群れは！あり得ないだろ！

「太陽君っていうの？あたし、西田愛里沙にしだあいりさっていうのー。よろしく。ありさって呼んで？」

西田がそう言った瞬間、

(呼ぶかよ……)

太陽が言った。ストレートに言うんだね。それにめっちゃ無表情！

「ああ。」

ありっ?!「ああ」?それって、OKってこと?どっちなんだよ。面倒くさそうなことか同じ感じな言い方だけど……。わけ分かんない。

「あたしは佐々木智美ささきともみ!とまって呼んで？」

(うぜえーなあ……)

あれ?これって……。

「ああ。」

また「ああ」か!

おっと、もう1時間目始まるよ。

キンコーンカンコーン

「起立、気を付け、礼。おねがいします。」

これやんなきゃいけないのかな？まあ礼儀は大事だよねぇ……つて。なんでまたこっち見てんの？？

（教科書見せてほしい。）

ああ。まだ届いてないのね。仕方ない。

「え？」

太陽が不思議そうな顔してる。こっちが「え？」だよ。まったく。

「はい。教科書見せればいいんでしょ？自分で言ったんじゃん。」

「オレ言っつてねぇよ？」

「はい？」

言っただじゃん。「教科書見せて」って。ん。これってまさかの……。

「お前もオレの心読めるようになったのか？」

なぜ嬉しそうに言う？「こちらとあんまり嬉しくないぞ？人の気持ちなんて知れたらろくなこと言われぬよ……」。

「オレは言わねえけど……」。

なんでそんな顔して言うの？？

「これ、夢咲、五十嵐！教科書見せるのはいいが話を聞いてくれ。」
やばっ。注意されたよ。

「すみません。」

もう。女子の視線がチクチク刺さってくる……。そんなみるな！
私悪いことしたか？

（おまえもオレの心読めるんならずつと心で会話しようぜ！）

（そう言われてもね、顔みてなきや何言ってるのかさっぱりだよ。
。。。だから授業中は黙って授業を受ける。分かった？）

（ええー！。オレは喋りたいんだけど。。。）

（知らないよ。だって怒られたら成績落ちて高校いけなくなるんだ
よ？）

（高校？おまえ高校行きたいの？）

（当たり前でしょ?!）

「これ！夢咲と五十嵐！仲良いのは構わんが今は板書をせい！板書
を！」

「はい。。。。。」

まただ。。。。不思議と今は成績よりみんなの顔の方が気になる。
。。。さっさと黒板写そっ！

トントン。

(だから！シャラップ！黒板写せ！)

(いや、書くものねえーんだよ。)

びりっ！

(はい！これあげるからもう話しかけないで。)

キンコーンカンコーン

無事に終了……。隣の人のおかげで今日は二度も注意された。以後気を付けねば。

「なあ。」

「なに?!」

「この後も教科書見せてほしいんだけど……。」

「いいけどだ……っ!!!!?」

私の話を遮るように西田達が入って来た。

「太陽君教科書ないの？あたしの貸してあげるよ?」

「いらない。オレはこいつの借りるからぞ。」

そう言って私の頭に手をのせた。おい。縮むだろ。

「な・・・らしいんだけど・・・。」

西田さん？おもくそ睨んでます？？どうしたらそんな眼つきが出来るの？今度練習して太陽にやってみようかな。効くかな。この人に。

「ちょっと。ずっと思ってたけど私のこと、こいつとかおまえとか！しかも頭に手置きちゃって！私のことなんだと思ってるの？！」

「じゃ、ち・と・せって呼ぶよ。」

「そういうことじゃなあーい！」

あ、しまった。ここは教室だ。私はこんなキャラじゃない。

「いいじゃん別に。それがホントのおま・・・千歳ちとせなんだろう？だつたらそのままでもいいよ。」

「無理。」

「なんで？」

「こういう性格だからなにもかも上手くいかなくて、大切なものどっか行っちゃうんだよ！」

「なんでそんなこと・・・。」

太陽が黙った。私は熱くなって涙目だった。

あれも丁度1年くらい前かな。

転倒

1年前・・・

- - -

誕生日があと少しで来る。この年になっても誕生日が近付くとうきうきする。今年は何と！ミュージックプレイヤーもらうの！もう言っといたからきつと買ってるよね？あ、もう時間だよ。行くう。

「いってきますー！」

あれ？返事がない。なんか嫌な気分だな。きつと台所で洗いものしてて聞こえないんだ。じゃあ・・・。リビングのドアを開けて。と。

「いってきますあすー！」

どうだ？

「ああ、いってらっしゃい。」

うん。満足。

今日もいい天気だな。太陽出てる。汗っかきだから正直、太陽には雲に隠れてもらいたい。

ガラッ

「おはよー!」

私は人より声がでかい。だからみんな私の声に気付いた。

「あ!ちとちゃん、おはよう!」

「ちと、おはよー。」

毎朝声をかけてくれるのは小学校からの親友、のん。優しいから大好き!あと、違う小学校の中で一番最初に友達になった、ことちゃん。今は3人で仲良しなんだ。

「ちと!後期委員会どうする?私は美保委員やりたい!」

「へえ、のんは美保委員がいいの?!頑張つて!多数決になったら絶対手挙げるね!」

「ありがとつ。」

「ことちゃんはなにやるの?」

「あたしは規律かな。」

「規律かあ。大変そうだよね。」

「ちとはなにやんの?」

「私は学級委員!」

「うん。ちとちゃんならなれるね。あたし絶対手挙げるよ。」

「ありがとうね。」

キンコーンカンコーン

1時間目のLHR。ここで委員会決めがある。後期まで2ヶ月あるけど今決めないと間に合わないんだって。

「まず、学級委員の立候補者はいますか？男女各一名ずつです。まずじゃあ、男子から！」

「はい。」

一人しか挙げてない。黒崎君か。この人、何気人気あるよね。どの部分がいいのかよく分からないけど。いまだきつて男なら誰でもイケメンって言われない？あ、黒崎君ごめん。別にあなたの悪口を言ったわけでは……。

「黒崎君だけですか？そしたら黒崎君に決定します。拍手。」

パチパチ……

「では次、女子！いますか？」

すかさず手を挙げると……。あちゃ。愛里沙ちゃんも手挙げてるよ。事前調査では誰もいなかったから安心してただけど。こうなったら戦おう。

「二人ということなので多数決になりますね。二人は前に出て意気込みをどうぞ。」

愛里沙ちゃんが私に先言えっつ言うから先に言うことにした。

「えっと、前期は放送委員をしていたんですけど、前期に学級委員をやっていた西田さんを見て、私も学級委員になってみんなをまとめたい。と思ったので、立候補しました。よろしくお願いします。」
「どうや。下手に出る作戦だい！」

「私は前期も学級委員をされていて、やりがいがあったので、後期もやりたいなと思ったので立候補します。よろしくお願いします。」

まあ、どっちがなっても恨みっこ無しだよ。

「はい。ではみんなは伏せてください。どっちかに一回だけ手を挙げてください。」

うわあ。緊張するなあ。私にもみんなの様子は見えないからな……。

「ではまず、福井さんから。福井さんがいいと思う人は手を挙げてください。」

……。

「はい。では次、西田さんがいいと思う人は手を挙げてください。」

……。

「はい。目を開けてください。多数決の結果、福井さんに決まりました。みなさん拍手！」

パチパチ・・・

あ、のんが笑ってる。嬉しいな。頑張らなくっちゃ。

チツ・・・

ん？舌打ち？愛里沙ちゃんそんなにやりたかったのか・・・悪いね。でも勝ったもん勝ちじゃん？なんて当たり前のこと言ってるんだあたしゃあ。黙って席につこう。

順調に委員会も決まり、のんは美保委員になれた。でもことちゃんは・・・。一票差で負けちゃった。すごく悔しかった。でもまた来年もあるもんね。

今回の委員会決めで、大きく何かが変わる事とも知らず、私はのんきなことばかり考えてた。

翌日。

「おはよー!!」

教室に入ると、のんとことちゃんがいない。どこだ？あ、いつものとこかな。二人が朝行くところと言えばただ一つ、トイレだ！

キーー

トイレに入口を開けるとやっぱり二人はいた。

「のんとことちゃんみつけたっ！なにしてるの？」

そう言った私の眼に映ったことちゃんの顔は、今までとは少し違うふうに見えた。

「あのさ、ちと。ちとは大事な友達と思うから正直に言っよ。昨日の委員会決めの時、ことに手挙げなかったってホント？」

はあ？確かにこの手を天まで届くくらい思いっきり挙げましたけど？

「挙げたに決まってんじゃない！なんでそう思ったの？」

「え、愛里沙が言ってた。そうじゃないならいいんだけど。」

え、全然よさそうじゃないけども。ま、いっていうならいいのかな？

やっぱりこの時もまだのんきなことばかり考えてた。私には危機感というものが全くなかったんだよ。この日も、その次の日も、ことちゃんとのんは私から一線引いたような態度だった。

-
-
-

そしてこの出来事から2週間後、誕生日がやって来た。

私は頼んでおいたミュージックプレイヤーをもらった。うれしくてうれしくて、誰かに自慢したかったけど、操作の仕方何も分からない。あ、まず充電か。充電完了したらお父さんに操作の仕方教えてもらおうっ。

「千歳！ケーキ、ケーキ！」

私はショートケーキが少し苦手。だから毎年チョコケーキ。本当においしいんだ。

「千歳いくよ？ハッピーバースデイトウユー・・・」

恒例の歌を両親が歌ってくれた。それから13本のロウソクを吹き消した。

「千歳は13才か。まだまだ子供だね。」

「ええ、でも電車は大人料金だよ。だから子供ではないよ！」

「そうか。」

優しく笑うお父さん。

この後も、家族3人でずっとおしゃべりしてた。

「そろそろ充電できたんじゃない？」

お母さんがミュージックプレイヤーを充電器から外してくれた。それからお父さんが操作方法を伝授してくれた。早速PCで「五十嵐」の曲を入れた。やった。これから毎日、五十嵐の歌が聞けるんだ。

やっぱりのんとことちゃんは余所余所しくて、誕生日が来るころにはもう、ほとんど口さえも利いてなかったと思う。

私は内心、そのことをすごく気にしてた。

私の誕生日から3ヶ月後、お父さんがいきなり離婚宣言をした。どうやらいきなりと思ったのは私だけだったらしい。お母さんも前から、お父さんに好きな人がいたことは知っていたらしい。この時点で家族の内私だけ知らないことがあったと思うと寂しい気持ちだった。

お父さんは出て行った。責任を負うため家のローンとかは払ってくれるって。いつも3人で笑ってて、いつまでも3人で笑い続けられると思ってたのに。ダメだね。平和ボケは。

お父さんが出て行ってから2週間後。今度はお母さんまでいなくなっちゃった。なにこれ？お母さん？お母さんはずっと私と一緒にいるって言ったじゃん。破るためにある約束なんていらさないよ。

文章にしたらたったの7行かもしれない。けどこの7行の間に私の中でいろんな感情が生まれた。しかも今、私、もしかするとかなり落ち込んでるかもしれない。誰かに話すと大泣きしちゃうかもしれない。だったらもう黙ってよう。ていうか今、ケンカ(?)中だから話す相手もないんだけど。

このまま夏休みに入り、私の苗字は変わった。夏休み中は、うだうだして、宿題して、うだうだして、を繰り返して、夏休み明け早々テストがあったから、テストの一週間前からは勉強をした。

まあ、テストは悲惨なことになってた。のんやことちゃんともいまだに口を利いていない。でももういいの。弁解する気にもなれない。

てか、私は否定したし。信じなかったのは向こうだし。

これの何日後くらいかな？

誰かが先生に、このことを話して、ことちゃんに私が手を挙げたかどうか聞いたらしい。もちろん先生は事実を伝えた。そこから広まるのは早かった。ことちゃんものも、すぐにそのこと知ったらしい。青い顔してた。それから、私に謝りに来た。私は「別に気にしてない。」その一言だけ言い放ってその場を去った。

もう2人と関わる気はなかったから。

人は信じられないって暴君ディオニスも言ってたし。あ、でもディオニスも最終的には人を信じれるようになったよね。

翌日

「今日の放課後は各種委員会があるので、委員の人は残ってください。」

まじか。部活サボれるじゃん。ま、ここ最近行ってないけどね。んと、学級委員は1年1組か。隣のクラスね。移動しなきゃ。

「福井！もういく？」

「いくけど。私もう夢咲だから。」

「あ……ごめん。じゃあ、一緒に行こうぜ。」

「……うん。」

長い。話が長い。社会の先生、益子先生はもうすぐ定年。喋るのがとても遅い。私的に可愛いから好きなんだけどさ、眠くなるんだよね。

「なあ、益ちゃん話し長くね？」

益子先生の愛称（？）は益ちゃん。本人の前では呼べないけど・・・。

「ね。長いね。」

この後15分後、ようやく委員会は終わった。よし。帰ろ。リュック背負って教室を出ると、

「なあ、夢咲。夢咲って2丁目だよな？俺3丁目だから途中まで一緒に帰ろうぜ！」

「まあ、別にいいけど。」

断る理由ないしいいや。と思っで一緒に帰る事に。

この後、黒崎君は私からすれば興味ない話を延々と続けた。私の子の判断ミスで、またまた私を悲劇が襲う。

この後2日後くらいかな。黒崎君に呼び出された。何の話だろう。私はまだこうというのがよく分かんなくて、呼び出されたのに無視してはいけないと、素直に行ってしまった。

「なんで私のこと呼んだの？委員会の話？」

「違って……。あのさ、俺、ずっと夢咲のこと好きだったんだ。付き合ってほしい。」

「……はひ？付き合う？ってあの……。え？男女が一緒に帰ったりデートしたりあの付き合う？」

「ごめん。無理。」

言葉が見つからないからストレートに言った後、速攻で家に帰った。

悲劇はここからだ。翌日、学校に行き、教室に入った瞬間、愛里沙ちゃんが泣きはらした顔で私に掴みかかろうとした。なにかに襲われると思ったら条件反射でよける。これが人間だろうに。よけられるとは思ってなかったらしく、愛里沙ちゃんは顔から……。

「くそ！なんなのよあんた！」

いや、そっちこそなんだよ？いきなり掴みかかってきて。びっくりするでしょう。

「和哉やに色目使って近付いたくせに、拳こぶしげ句の果てに告つられたら振るってアンタどんな神経してんの？！」

なんだかさっぱりだ。この人は何を言ってるの？大体、和哉って誰よ？色目って何？告白の部分しか分かんなかった。

面倒くさいからスルーで。

「なに？逃げんの？卑怯者！」

この一件で私は男が嫌いになった。

-
-
-
-

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5909z/>

おひさまsummer

2011年12月28日02時51分発行